

取せしむることせり

海軍自派和士年 磯岡中佐桐野義隆を海軍省軍需局より特派して殖産局嘱
とて中々独立して京城海軍武官府となし海軍各需の獲得に努力せり

その状況別表の如し。弊内並要軍需三品を配置附圖の如し。

註滿洲總動員業務は関東軍自体の作戦的要素による自派自派の計畫に欠

ト日本作戦資源の統合計畫に躍進せしむるも、和士年二月陸軍自動員課
より陸軍中佐照三也同少佐河越重定と同本軍司令部に増加配属せり

第二節 人員資源

人口は明治四十三年日韓合併当時二百萬人の少くは衛生の向上と總消費達

とに依り逐年増加し昭和十七年末には實に二百八十二万七千三百八十八人達しその出生

率は千人に付三〇人弱死の率一五入強にして増加率は二四人、七エを示し日本人の増加

率一三、六を上廻る好成績を示し年々三十六万人を増加し人口密度は二平方

に付一、二〇〇人(日本は一九二一人)昭和十五年国勢調査を示せり

註一、昭和十七年末朝鮮人口

總數 二六、六六三、一五〇人

朝鮮人 二五八、二七、三〇八

日本人 七五八、五九五

外国人(中國人分) 七六、二四七

註 二在日本及在華朝鮮人死々如し

一在日本朝鮮人數(昭和十八年度末警務局保安課調)

男 一、一九三、八三一人

女 六四〇、二三九人

計 一、八三四、〇六〇人

二在滿朝鮮人數(昭和十八年七月末日現在(總務課調))

男 八三四、一九二人

女 七〇六、三九一人

計 一、五五〇、五八三人

三在支朝鮮人數(昭和十八年十月一日現在(總務課調))

北支 六五八、〇八人

中支 一八一、四五人

南支 一五六八人

四、その他 蒙疆三三七六八（一八年十月一日現在）

朝鮮の勞力効力は文化水準低く産業不振の時代は極めて低能率にして昭和十一年頃仁川の東洋紡績、永登浦の鐘淵紡績の女工能率は日本の同種工場女性の約セツシにすぎざり土木建築に於ても技術的能力極めて低く日本勞務者は勿論中国の苦力にも遙かに及ばざるものよりしか朝鮮内の軍需工場設置に伴い逐次訓練を経て昭和二十年には大体エエに於て日本人のハッ% 鉄工業其の他に於てはハ。%乃至九。%の能率に到達せり時恰も日本人に總動員國民總力總当り態勢に直面したるは内地勞務者の不足甚しく殊に炭坑及軍需品機械工業に大量の朝鮮勞務者と要求することとなりたり朝鮮總督府指導の下に勤勞奉仕隊として徵用せられ之等勞務者は故郷を離れ爆撃熾盛なる日本に於て軍需工場に嚴重に收容せらるるものより不別れなる地下幾百千尺の炭坑金屬鉱山に就勞するありその精神的肉体的苦痛は甚大なるものありたることは十分感謝せられべきものと謂ふべし

而して日本渡航者帰還者残留者年次表
 左の如し

年次	渡航者	帰還者	日本残留者
昭和三年	一、二六八	一、二〇、七四八	一、一三三
四年	一、六〇九	一、四三、六六七	三、二五六
五年	一、八四七	一、七六、八八五	一、七、七七〇
六年	三、三〇四	三、一八、〇二七	一、二六、一四一
七年	三、三二五	三、四二、四九六	八三、一七四
八年	三、三〇四	三、一八、〇二七	一、二六、一四一
九年	三、三〇四	三、一八、〇二七	一、二六、一四一
十年	三、三〇四	三、一八、〇二七	一、二六、一四一

十八年以降は更に急増し特に十九年渡航の勤勞奉仕隊員は帰還輸送杜絶され久代了せず終戦後朝鮮に帰還せるもの尠からず

更に之等の勤勞奉仕隊員の日本に於ける戦傷死者亦相當の數に上る見之
 として彼等の故郷后郷里に在住する日本人團體に對し慰靈料を要求

したる例からず

（註）群山上於ては日本人世話会に對し朝鮮奉公青年二名に付昭和二十年金

0106

一萬石を要した。

以上日本海軍部は、^(劣)以上は軍隊要員及び停虜監視要員として
或は志願兵に徴したる八軍属に採用せられたるもの約二十五萬に達せしむる
の詳細は志願兵入隊天制度の記事に譲る

第三節 交通

其の一 鉄道

日露戦前明治三十二年京城仁川間の鉄道開通に始まり軍事約要
望と治安懸念の上より、要求と産業交通の見地の要請とにより四十年
間に国有鉄道四千五百七十軒私設鉄道二千八百軒合計六千四百七十
軒に達せり

一明治三十八年竣工

京釜線

(日露戦争要望)

二明治三十九年竣工

京義線

(同 右)

三明治三十九年

湖南線

(治安と産業)

四明治三十九年

平元線

(国防と産業)

五明治三十九年

咸鏡線

(国防と産業)